⑦

ご遺体のケアを看護師が家族と一緒に行うことについての家族の体験・評価

山脇　道晴*

サマリー

この研究のおもな目的は，ホスピス・緩和ケア病棟から退院した患者の遺族から，“ご遺体へのケア”を一緒に行った家族の体験と評価を明らかにすることである．副次的な目的として，ご遺体へのケアを一緒に行わなかったことの理由と評価，病院で行うご遺体へのケアについての必要性の認識を明らかにすることである．配布数９５８通，回答応諾数５９８通の質問紙調査を分析した．

家族が看護師と一緒にご遺体へのケアを行うことは，「良い思い出」として体験されており，満足が高く後悔が少ないが，悲しみがいやされたり気持ちの整理がつきやすくなったりした，とまではいえないこと．家族の満足感に起因するご遺体へのケアは，故人の容姿の穏やかさと尊厳が保たれること，および家族の意向が聞き入れられること．看護師が行うご遺体へのケアの認知度は半分程度のため，行うことと目的や効果の説明が必要であること．以上のことが示唆された．

目　的

この研究のおもな目的は，ホスピス・緩和ケア病棟から退院した患者の遺族から，“ご遺体へのケア”*1を一緒に行った家族の体験と評価を明らかにすることである．副次的な目的として，ご遺体へのケアを一緒に行わなかったことの理由と評価，病院で行うご遺体へのケアについての必要性の認識を明らかにすることである．

結　果

配布数958通，回収数640通，回答拒否数を差し引いた回答応諾数は598通で，回答応諾率は62%であった．

ご遺体へのケアを行うことの説明について，行うことと目的や効果の説明を受けた家族は34%であった（図1）．

ご遺体へのケアは満足のいくものであったかは，「満足」および「とても満足」が77%であった（図2）．

ご遺体へのケアについて，行われた内容のうち，50%以上の項目は，「穏やかな表情にしてくれた」「亡くなった後でも生前と同じような配慮やあつかいをしてくれた」「目や口を閉じるよう

*聖隷三方原病院 看護部

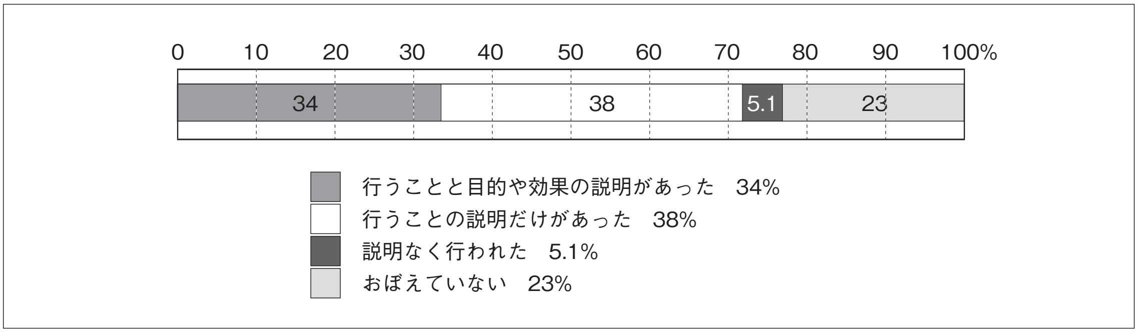

図１ 看護師から“ご遺体へのケア”を行うことの説明はあったか

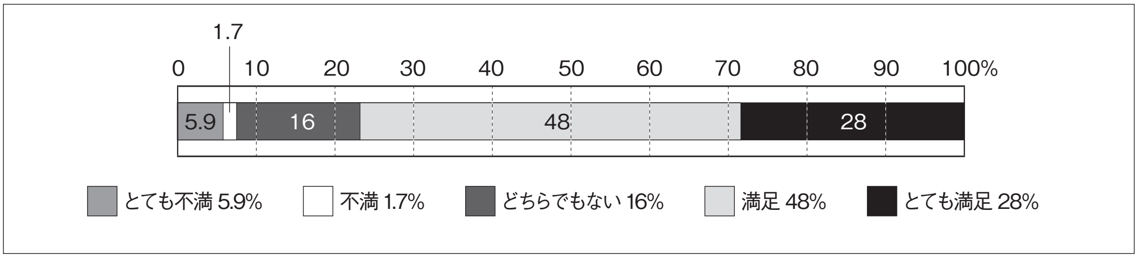

図２ “ご遺体へのケア”は満足いくものだったか

表１ “ご遺体へのケア”の行われた内容

穏やかな表情にしてくれた	77%
亡くなった後でも生前と同じようなあつかいをしてくれた	72%
目や口を閉じるようにしてくれた	72%
家族の意向（服装，帽子，めがね，入れ歯，髪型など）を聞いて取り入れてくれた	56%
のどや陰部に詰め物をした	27%
傷や腫瘍の部分を目立たなくしてくれた	15%
あまり変わらなかった	8.0%
長い時間がかかった（待たされた）	5.2%
ケアが済んだ時はきれいであったが，そのご顔色が変わったり汚れてしまったりした	3.7%

割合の多い順に列挙（あてはまるものを選択：複数回答可）

にしてくれた」「家族の意向を聞いて取り入れてくれた」であった（**表１**）．

看護師からご遺体へのケアを一緒に行うか声をかけられた家族は 45%，かけられなかった家族は 32% であった．看護師と一緒に行った家族は 40%，行わなかった家族は 60% であった．声をかけられて行った家族は 81%，声はかけられなかったが行った家族は 4% であった（**表２**）．

*[1] “ご遺体へのケア”：家族が最期の時間を過ごした後，遺体を清潔にし，生前の外観をできるだけ保ち，死によって起こる変化を目立たないようにするために看護師がご遺体に行う処置のことをいう．

表２　“ご遺体へのケア”について看護師の声かけと実際のケア

		b.“ご遺体へのケア”を看護師と一緒に行いましたか		合計
		一緒に行った	一緒には行わなかった	
a. 看護師から“ご遺体へのケア”を一緒に行うように声をかけられましたか	声をかけられた	199（81%）	48（19%）	247（45%）
	声はかけられなかった	7（4.0%）	169（96%）	176（32%）
	覚えていない	13（10%）	112（90%）	125（23%）
	合　計	219（40%）	329（60%）	548

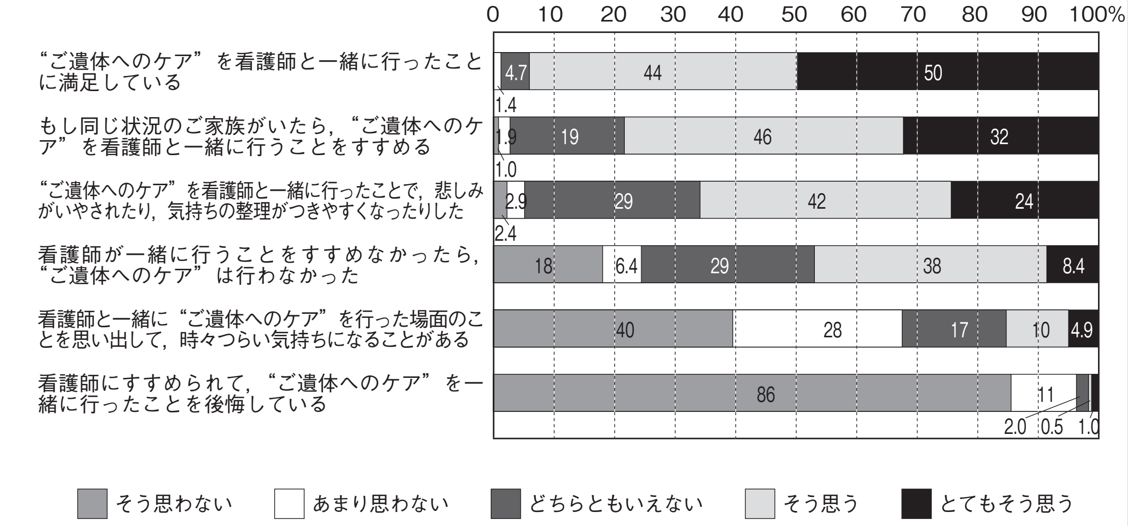

図３　看護師と一緒に“ご遺体へのケア”を行ったことへの今の気持ち

看護師と一緒にご遺体へのケアを行ったことの今の気持ちについて，「そう思う」と「とてもそう思う」の割合が90％以上の項目は，「ご遺体へのケアを看護師と一緒に行ったことに満足している」（94％）であった．反対に「そう思わない」と「あまり思わない」の割合が90％以上の項目は，「看護師にすすめられて，“ご遺体へのケア”を行ったことを後悔している」（97％）であった（**図３**）．

ご遺体へのケアを看護師と一緒に行った時の体験や気持ちについては，「そう思う」と「とてもそう思う」の割合が80％以上の項目は，「体をきれいにすることができてうれしかった」（94％），「お化粧をして，穏やかな表情にしてあげられて良かったと思えた」（92％），「家族だからご遺体へのケアをしてあげたいと思った」（88％），「ご遺体へのケアを一緒にすることでねぎらいの気持ちをもった」（86％），「故人への感謝の気持ちがもてた」（84％），「故人とのお別れの時間を持つことができた」（82％），「一緒にご遺体へのケアをすることで最期の良い思い出になった」（80％）であった．反対に，「そう思わない」と「あまり思わない」の割合が80％以上の項目は，「看護師と一緒にしている時に，戸惑いがあった」（82％）であった（**図４**）．

ご遺体へのケアで行ったことの内容では，多い

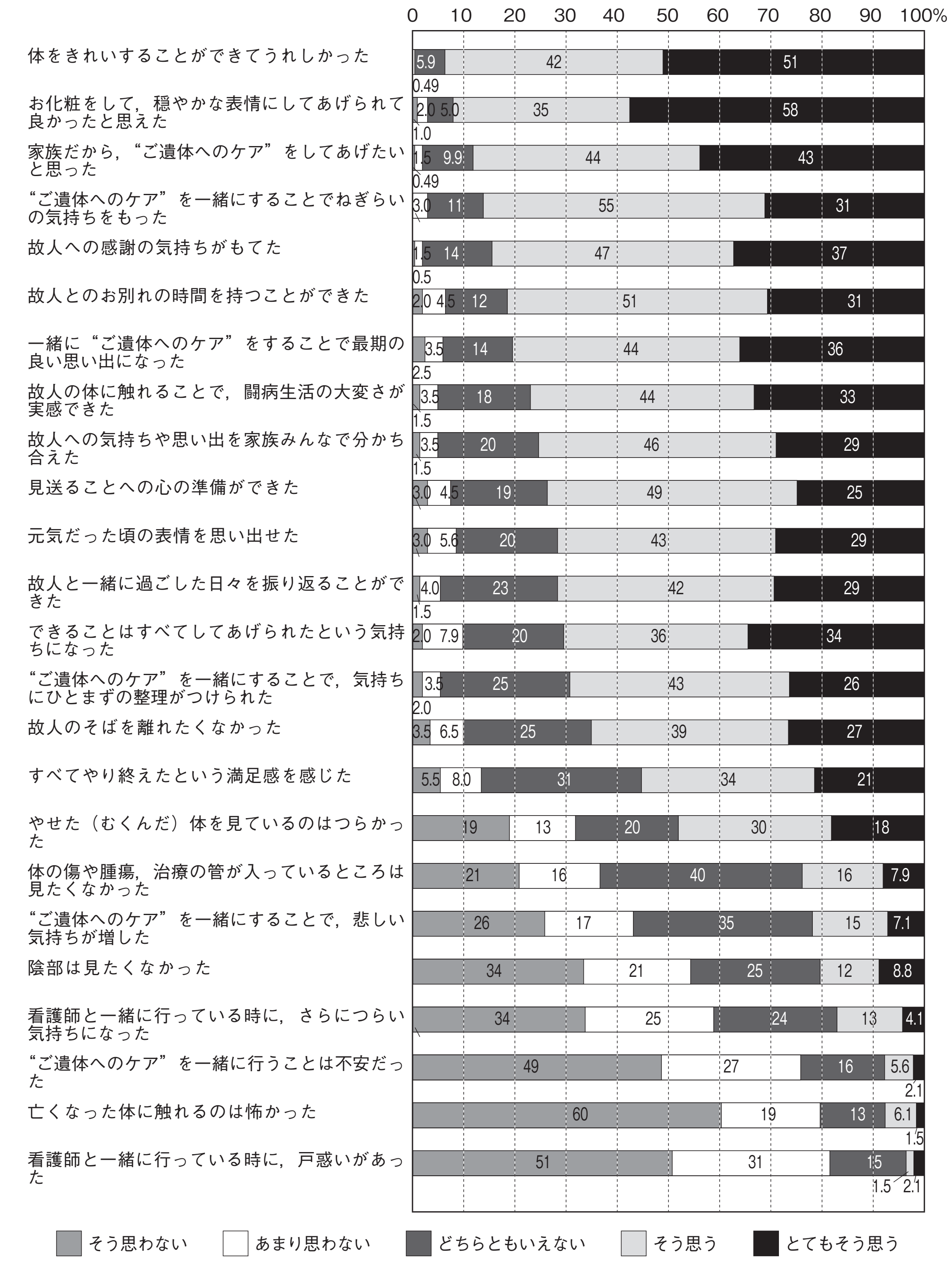

図４　“ご遺体へのケア”を看護師と一緒に行った時の体験や気持ち

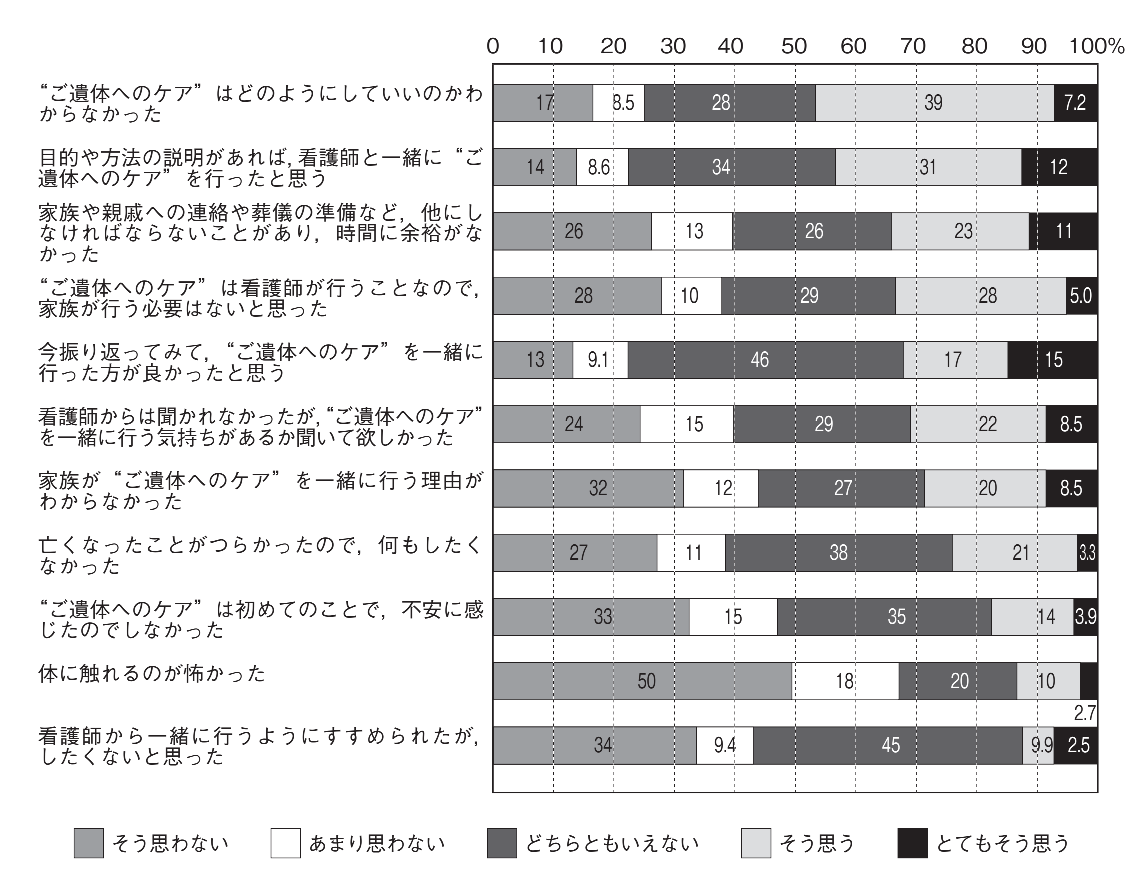

図５　“ご遺体へのケア”を看護師と一緒に行わなかったことの体験と気持ち

順に「体を拭く」（71％），「着替え」（68％），「お化粧」（54％），「洗髪」（22％），「入浴」（15％），「詰め物」（14％），「シャワー浴」（7.6％）であった．

ご遺体へのケアを行わなかった家族の体験や気持ちについては，「そう思う」の割合が比較的多い項目は，「ご遺体へのケアはどのようにしていいのか分からなかった」と「目的や方法の説明があれば，看護師と一緒にご遺体へのケアを行ったと思う」であった．「そう思わない」の割合が比較的多い項目は「体に触れるのが怖かった」であった（**図５**）．

家族の死別経験について，医療機関では67％，自宅では31％，死別経験なしは11％であった．

病院でご遺体へのケアを行うことを知っているかの問いは，「以前から知っていた」が50％，「今回初めて知った」は50％であった．

ご遺体へのケアは必要と思うかの問いは，「必要だと思う」が81％，「必要だとは思わない」は1.6％，「どちらともいえない」は17％であった．

考　察

ご遺体へのケアを行った家族は，看護師による呼びかけと家族の役割としての意識からご遺体へのケアに参加している．おもに「体を拭く」「着替え」「お化粧」を行っており，故人への「ねぎらい」や「感謝の気持ち」が実感され，家族は「うれしさ」や「良かったこと」として，「良い思

い出」になったと感じられているが，悲しみがいやされたり，気持ちの整理がつきやすくなったりした，とまではいえない．また，行うことへの「不安」や「戸惑い」が少ないのは，看護師と一緒に行ったためと思われる．

ご遺体へのケアを行わなかった家族は，看護師から一緒に行うか声をかけられなかったことが主要因と思われる．そして，「したくない」「不安」「怖さ」という気持ちが強かったわけではなく，「目的や方法の説明」があれば，少なからず「行っていたかもしれない」ことや，「行ってみても良かったかもしれない」と感じていたと思われる．

看護師からご遺体へのケアを受けた家族は７割以上が満足されており，その要因として，故人の容姿の穏やかさと尊厳が保たれたことと，家族の意向が反映されたことが挙げられる．

９割の死別経験に対して，病院でご遺体へのケアを行うことを知っていたのは５割程度であるため，行う際には目的と方法の説明が必要である．

家族の８割以上がご遺体へのケアは必要と認めているのは，ご遺体へのケアに対する満足感によるものと思われる．

結　論

家族がご遺体へのケアを行うことは，「良い思い出」として体験されており，満足が高く後悔が少ないが，悲しみがいやされたり気持ちの整理がつきやすくなったりした，とまではいえない．

家族の満足感に起因するご遺体へのケアは，故人の容姿の穏やかさと尊厳および家族の意向が聞き入れられることである．

看護師が行うご遺体へのケアの認知度は半分程度のため，行うことと目的や効果の説明が必要である．

〔付帯研究担当者〕
清原恵美（聖隷三方原病院 看護部），**森田達也**（聖隷三方原病院 緩和支持治療科）